

琉球大学学術リポジトリ

第二次世界大戦前後のペルーにおける日系社会とキリスト教：金城次郎日記を導き手として

メタデータ	言語: 出版者: 沖縄移民研究センター 公開日: 2018-11-13 キーワード (Ja): ペルー日系社会, キリスト教社会事業, 二世教育問題, ナショナリズム, 二世カトリック修養会 キーワード (En): Religion and Social Enterprise, Second Generation Education Problem, Catholic Sister as Nurse, Catholic Cultural Association for Nisei, Nationalism and Christianity 作成者: 山脇, 千賀子, Yamawaki, Chikako メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002010101

第二次世界大戦前後のペルーにおける日系社会とキリスト教 — 金城次郎日記を導き手として —

山脇千賀子

- I. はじめに
- II. 戦前の日系社会はどのようなものだったのか
- III. 戦前期の日本人移民とキリスト教との出会いをめぐって：金城次郎の場合
- IV. 日本人移民と慈善病院とカトリック
- V. 二世教育とカトリック：第二世カトリック修養会
- VI. おわりに

キーワード：ペルー日系社会，キリスト教社会事業，二世教育問題，ナショナリズム，第二世カトリック修養会

I. はじめに

移民社会はナショナルかつインターナショナルな思惑が交錯する舞台である。20世紀は、移民の母国でも移民先でもナショナリズムが渦巻いて、社会や人のあり方に大きな影響を与えてきたと同時に、インターナショナルなつながり方が模索された時代といえよう。こうした時代に翻弄された最前線が移民社会だった。

本稿では、第二次世界大戦前後にナショナリズムの最前線のひとつに立たされたペルーの日系社会においてキリスト教がどのような意味を持ったのか、またキリスト者が果たした役割について、1914年から58年までペルーで生活した沖縄人移民である金城次郎(1894～1988)の日記を導き手にして考察したい¹⁾。金城次郎は、水稻栽培をペルーで成功させた功績で知られているが、ペルーにおいてキリスト教と出会い、多様なキリスト者とのかかわりをもちながら、1950年に正式にカトリックの洗礼を受け、実業生活から身を引いた後には伝道者になることを夢みるほど熱心なキリスト者であった。

本来、キリスト者であることは国籍を越えた信仰の問題であるがゆえに、移民社会においてはナショナリズムを越える機能をキリスト教に託してきた事例に事欠かない。米国においては、プロテスタントが日系人社会と米国の全体社会を架橋する役割を果たしたことが様々な研究で指摘されている(友枝1969:28,31)。20世紀初頭の米国では、日本人移民定住化を進めようとする流れのなかで、キリスト教の布教活動が戦略的に行われているが、それは国内・国際社会においてキリスト教同胞主義に基づく活動を行うことによって、排日問題へ対応しようとするものでもあった(吉田2011)。

ペルーでも日本領事館が先導して日本人移民の定住化をすすめるために、現地社会において支配的なカトリック信仰への理解が促された。そのため、現地生まれの二世が洗礼を受けて、現地有力者との代父母関係をもつこと（コンパドラスゴ・パドリナスゴ）が、生活の便宜上も重要であると考えられてきた（秘露日本人商業組合 1936:263-5）。つまり、一世のカトリック受容は、なによりも結婚・葬式等の儀礼やカトリック祭礼行事への参加などの便宜的・世俗的レベルにおいてすすんだ。カトリックが支配的なラテンアメリカ諸国のひとつであり、ペルーとは比較にならないほど多くの日本人移民を戦前・戦後に受け入れたブラジルにおいても、一世のカトリック改宗者の動機は、内面的な信仰の問題としてよりも、周囲の人間関係を重視した結果として洗礼を受けているケースが圧倒的に多い（前山編著 1996:155-6）。

こうした意味において、金城次郎のような内面的信仰レベルにおけるカトリックへの改宗はまれだった。しかも、彼の改宗の過程は一筋縄では描写しがたく、第二次世界大戦前後のペルーにおける日系社会の動向と興味深い関わりを示している。特に、キリスト教が個々人の内面的信仰の問題に関わるだけでなく、さまざまなレベルでの「社会」を形成する原動力となっていることがみえてくる。それは、よく知られているようにキリスト教系組織やキリスト者が社会における慈善事業を積極的に担ってきた歴史と深くむすびついており、同時に、明治以降の近代国民国家創成期の日本にとってプロテスタントイズムが近代化のエージェント（行為主体）として機能してきた歴史とも切り離して考えることはできない。本稿は、上述した巨大な問題群に対するささやかな考察の試みである。

Ⅱ. 戦前の日系社会はどのようなものだったのか

ペルーは16世紀にカトリック国スペインによって植民地化されて以降、約300年にわたって、カトリック教会の原理が公的組織のあり方のみならず、個々人の生活と人生のあり方を規定するほどの影響力をもってきた国である。1821年に政治的独立を果たし、ペルー共和国という近代国家の相貌を整える過程は、カトリック教会から政治的・経済的権力を世俗的権力へと移行させることでもあった。しかし、教会権力と世俗権力とのかけひきは現在に至るまで続いているとあってよいだろう²⁾。

このような宗教的土壌をもつペルーへの日本人移民の歴史は1899年に始まる。同じく「異教徒」の東洋人移民として中国人が正式に契約労働者として導入されたのは、その半世紀ほど前に遡るが、それはペルーが欧州からの移民を誘致するのに失敗した結果である。同時代には、米国にむけては数千万人の単位で大量に欧州移民が流入しているのに、ペルーには数万人程度しか入らなかった。これに対して、中国人移民は1874年までに約9万人

にも上り、大農園での農業労働者のみならず鉄道敷設工夫やグアノ（肥料になる鳥糞）採掘者などとして、奴隷並の労働条件のもとで働かされた。ペルーで正式に奴隷制が廃止されるのは1854年のことであるが、労働慣行は簡単には改まらなかった。このような劣悪な労働条件にある農園の契約労働者として、日本人移民は導入された³⁾。

日本人のペルー移民事業の父といわれる田中貞吉（?～1904）は、日本海軍による派遣で1882～1889年の8年間米国留学し、この間に後にペルー大統領（1908～12, 1919～1930）になるアウグスト・レギーア（1863～1932）と出会う。米国で出会ったレギーアと田中の交友関係が、1899年に始まる日本人移民事業に大きな役割を果たしたことは、本稿の趣旨にとって示唆的である（伊藤・呉屋1974:16-7）。米国は日本にとってもペルーにとっても近代化のエージェントであったことによって、両者の利害をむすびつける日本人移民事業の立ち上げに一役買ったことになる。

また、田中貞吉とのサンフランシスコ時代のつながりによって1904年にペルーに呼び寄せられた森本市太郎（1872～1959）は、その後「日系社会の元老」と言われるほどの存在となった人物である。森本は16歳の時に東京・神田教会でプロテスタントの洗礼を受け、同志社でも学び、以来キリスト者としての生き方を全うし、日系社会にとどまらない社会事業家としての活動を自身の実業と両立させて、同じくキリスト者の夫人と共にペルーに帰化し、ペルーに身を捧げた稀有な存在である。

このように移民事業に関わった移民会社社員・公使館員・有力商社社員は、ペルー日系社会の指導者層を形成した。英語やスペイン語を使うことができ、海外の事情に明るい人々である。1913年に南米で初めての日本語新聞『アンデス時報』を創刊したのは、これらの指導者層によって組織された「日本人協会」（1912年創設）であった。

これに対して、移民労働者としてペルーに渡った人々は、職業や出身県や居住地をもとに組織化していた。1907年にはリマ日本人理髪同業者組合、1909年には沖縄青年会（のちの沖縄県人会）を創設している。こうしたなかで1910年に創設された「日本人同志会」に同業者組合メンバーが合流するかたちで1913年に「日本人会」が創設され、この発起人メンバーが主となって『日秘新報』が1920年に創刊された。発起人の一人で、戦前の日系社会における情熱的言論人として知られる田中重太郎によれば、1917年に赴任した領事のおよびかけによって組織された在ペルー日本人移民を統合する組織である「秘露中央日本人会」の機関紙が必要になったという。『アンデス時報』は「時に悪意のある黙殺主義」によって移民労働者層の利害を脅かすという認識を田中らはもっていたのである（田中1969:183）。

当時、一万人に満たない日系社会において日本語新聞が分立する事態は、異なる階層間の相互不信感に基づく分離主義の表れといえるだろう。「中央日本人会」というペルーに

おける日系人の利害を代表するエスニック組織はできても、日系社会は決して一枚岩ではなかったのである。その後、1929年7月には、三紙となっていた日本語新聞社を統合して『リマ日報』を創刊したが、間もなく、同年11月には指導者階層が主幹となった『秘露時報』が創刊され、二紙が並立する状態は1941年12月の太平洋戦争開戦までの間続いた（田中1969：189-194，日本人ペルー移住史編纂委員会1969：195-197）⁴⁾。

前述したレギーア大統領が1930年に失脚したことは、日系社会にとって最強のパドリーノ（代父・宗教上の保護者）を失うことを意味した。1930年代のラテンアメリカは、世界大恐慌の影響を受けて、ナショナリズムが席捲する時代となる。もっとも、ナショナリズムの隆盛は1930年代の世界中でみられ、第二次世界大戦へとなだれ込んだ。日本も例外ではない。満州国建国をめぐる国際連盟を脱退し、国際的な孤立へと向かっていく日本の舵取りは、ペルーの日系社会にも影響を及ぼした。これを象徴するのが、後述する二世の教育現場である日本人小学校の教育方針をめぐる議論である。

1920～30年代には二万人以上となっていた日系社会は、急速な経済成長をとげていたが、これを好ましい動きとは評価しない人々がペルー社会のあらゆる階層に存在した。日本人移民の経済活動による利益の多くが現地ペルーに還元されずに日本へ送金されており、いずれは利益をもって日本に帰国することを目標としている日本人はペルーの富の略奪者として認識されてもおかしくないからだ。日本人はペルー社会の中に閉鎖的なコロニーをつくって、ペルーになじもうとしない民族だという非難もあった。それらの非難の背景には当時の西洋世界で流布していた黄禍論的な人種差別意識もあっただろう（日本人ペルー移住史編纂委員会1969：181-6，204-11）。

そうしたなか、1932年4月には失業者対策としてペルー人従業員八割法令、1936年6月には移民および営業制限大統領令が發布され、1937年の日中戦争の本格化にともなう日本商店のボイコット運動などに代表される日系社会への締め付けがじわじわとペルー社会全体に広がった。

1938年2月には在ペルー私立学校細則が發布され、俗に教育八割法令と呼ばれた。主に日本人学校を標的にしたと考えられる教育分野におけるナショナリスティックな方針の表明で、ペルー文部省認可校においては、外国語を使った教育および外国人教員の割合を二割以下にしなければならないというのである（日本人ペルー移住史編纂委員会1969：316-8）。この法令は、日系社会には大きな衝撃とともに受け止められた。「日本人としての教育」を日本人学校に託していた親にとって、その意向がペルーでは受け入れられないことを同法令が意味したからだ⁵⁾。

1939年調査によると、当時、ペルーにおける最大の日本人小学校であり、中央日本人会によって運営されていたリマ日本人小学校（創立1920年、ペルー公認1928年、日本文

部省在外校指定 1934 年、以下リマ日校) は、約 1,400 名にもものぼる生徒を抱え、日本人教師 25 名、ペルー人教師 15 名体制でバイリンガル教育を行っていた (日本人ペルー移住史編纂委員会 1969 : 304-5)。その他にも、ペルー全土の日本人集住地を中心にして 25 校の日本人小学校があったが、こうした学校に通わせる日本人移民の親たちの大多数は、いずれ日本に帰ることを前提にして子どもに日本式教育を受けさせることを希望していたのである。

これに対し、公使を筆頭とした日系社会の指導者層は、建前上、一貫して「日系ペルー市民」としての教育が行われるべきだという方針を示している。しかし、1927 年 1 月に発会したペルーにおける日本人小学校関係者の統合組織である教育連盟会による年に 1 回の総会記録をみると、戦前期をつうじて「日本国民としての教育」重視と「ペルー市民としての教育」重視の間で教育方針が揺れ動く様子がみてとれる (日本人ペルー移住史編纂委員会 1969 : 302-319)。そもそも、リマ日校のように日本とペルー両方の文部省による認可を受け、両者が相反するナショナリスティックな教育方針による教育を要求しているからこそ、このような問題が起こるのである。

こうした矛盾を抱えていた日系社会が、自らの組織について根本的に考え直すための機会は、悲劇的な形で訪れた。1940 年 5 月 13 ~ 4 日にリマを中心にして起こった排日大暴動である。日系人の商店や住宅などが暴徒に襲われ、甚大な被害にあった帰国希望者は 500 名以上に上った (日本人ペルー移住史編纂委員会 1969 : 237)。この暴動は、戦後の日系社会でも長く語り継がれ、第二次世界大戦中の日系人の北米への強制連行の歴史とともに、集団的トラウマとなっている。1990 年の大統領選挙に日系二世のフジモリが立候補した際に、「排日大暴動が繰り返されてほしくない」という声が日系社会のあちこちで聞かれたほどである。その暴動をきっかけに前述の森本を中心にして、日本人小学校や中央日本人会の組織のあり方をよりペルー社会に開かれたものとするための検討委員会が組織されたが、本格的な改革が始まる前に日米開戦の日を迎えることになった (日本人ペルー移住史編纂委員会 1969 : 231-2)。

では、上述したような戦前期の日系社会において、キリスト教はどのような意味をもっていたのだろうか。日本人移民はどのようなかたちでキリスト教に出会うのだろうか。以下、金城次郎の場合をみてみよう。

Ⅲ. 戦前期の日本人移民とキリスト教との出会いをめぐって：金城次郎の場合

既述したように、戦前期の日系社会における異なる階層間の垣根を取り払うために、統一的エスニック組織としての中央日本人会が作られた。にもかかわらず、異なる二つの階層の利益を代表する新聞社が戦前期をつうじて両立したことに象徴されるように、日系社

会の内実には歴然とした階層間格差が存在した。しかし、こうした階層間の隔たりを乗り越えようとする動きはさまざまなかたちでみられた。キリスト者による活動は、そのひとつである。

指導者階層のなかには、ペルーに渡る以前にキリスト者となっていた人がいたことは既に指摘した。そのほとんどはプロテスタントである。明治維新によって日本の近代化が始まってキリスト教布教が許されてから、多くの英語圏の宣教師が日本に派遣されたためであろう。そして、当時のキリスト教布教は、今では社会福祉事業と呼ばれるものと共に行われた。キリスト教関係者・組織による近代的な病院経営や女子教育のための学校経営をはじめとして、孤児・浮浪者・身体障害者・犯罪者など様々な理由によって社会的排除を受けた弱者に対する組織的支援活動は、明治日本における社会改良事業として画期的なものと評価される。

その証拠に、1890年に行われた第1回帝国議会選挙の結果として、議員300名中キリスト者13名が含まれていた。これは、当時の総人口に占めるキリスト者の割合の9倍近い(ケーリ 2010:307)。「キリスト者が政治家として選好される理由の一つは、キリスト者が高潔であって、信頼でき、公益業務を安心して任せることができる、と同郷の人が知っていたことによっていた」という(ケーリ 2010:307-8)。先達のキリスト者の活動が公益に合致する良い社会事業であることを広く知られていたのだろう。

金城次郎がペルーで親しく交際するようになるキリスト者の代表格が、山本邦之助(1869～1955)である。山本は東京高等商業学校卒業、地元村役場、三井銀行を経て、日本郵船勤務中、1902年V.W.ヘルム指導の聖書研究会に参加して銀座教会で洗礼を受ける。1905年には東京YMCA第二代目総主事となり、社会教育的視点からの事業拡大・寄宿舎建設、1917年の国内初室内総合体育館建設などにより功績を残しているが、1923年関東大震災で罹災・引責辞職して、1924年からは青山学院高等学部商科長を務めた。日本体育会の功労者である岸清一博士が出資するペルーの会社で代理人を果たすために渡り、1928～1939年にわたりペルー・レティス農事株式会社の役員を務めた後、帰国した(山本 1948)。

山本は1928年に新しく創刊された秘露時報社の主幹としても働いている。この時、次郎は同新聞社懸賞論文で3等を受賞した⁶⁾。その後、山本のまわりにキリスト教の教えを乞う青年らが集まり、1931年にはキリスト教青年会を発足させ、聖書研究会や祈祷会などを定期的開催した(櫻井 1935:122)。次郎はリマに用事で出かける際に、こうしたキリスト者の集まりに参加するのを魂の栄養補給と呼ぶほど楽しみにしていた。山本と次郎は、レティス農事会社の事業融資を通じても頻繁にやりとりがあったが、次郎は山本のキリスト者としての教えを吸収することに尋常ならない情熱を示した。次郎は、いわば労

第二次世界大戦後のペルーにおける日系社会とキリスト教
—金城二郎日記を導き手として— (山脇千賀子)

働者階層の移民としてペルーでの生活を始めたが、持ち前の知的好奇心と向上心によってキリスト者である指導者層との交際をすることになるのである。

次郎は1894年糸満市与座に金城太郎三男として生まれ、1907年に東風平具志両間切立農業補習学校（のち島尻農学校）に入学し、1909年台湾へ糖業研究生として研修に行く。4年ほどの台湾生活の後、故郷で結婚。夫婦で1914年6月に兄の呼び寄せによってペルーに到着。初めはサトウキビ農園での契約労働者であったが、1916年からはリマから海岸部を約400km北上したチンボテ近郊の農園つき製糖工場の成分分析官として1930年まで勤め上げる。副業として、野菜栽培・販売をはじめ、理髪店・雑貨店・食堂経営も行うが、何よりもたゆまぬ研究を重ねた稲作で成功を収める。

製糖に関する専門知識と真面目な勤務態度、稲作の成功、さらには同郷者のみならず日本人移民のための相互扶助組織のリーダー的役割、夜学として自宅を開放した新聞購読会・スペイン語教室開催などの社会教育活動によって、移民会社役員をはじめとして指導者層から一目置かれる存在になったのである。

約14年間に渡る勤め人としての職から解放された5ヵ月後の1930年6月には、熱烈な救世軍大尉として有名な阿部稲造に勧誘され、約1年前にペルーに呼び寄せた甥の光太郎が入隊を決意し、自身も救世軍の活動に積極的に関わっていくことになる。

救世軍は、1865年ロンドンにおいてメソジスト牧師ブースによりクリスチャン・ミッションとして誕生した。軍隊形式をとった組織づくりをしているが、社会事業を通じた救霊事業を行うキリスト者集団である。世界に先駆けて資本主義の矛盾が顕わになった19世紀後半のロンドンでは、非人間的な労働・生活環境に苦しむ人々が大量に発生するという社会問題に対処するため、マルクス&エンゲルスらの社会主義思想が生まれたことが知られているが、同時に様々な社会事業が発展した。既述のYMCAも1844年にロンドンで誕生している。

日本への英国救世軍の上陸は1895年で、日本における救世軍の顔となる山室軍平も同年に入隊し、翌年には社会事業を開始している。「宗教を内なる信仰に閉じ込めるのではなく、霊魂上と並んで社会的な救済が求められる」という理念のもと、具体的には、出獄者救済所や醜業婦救済所の開設・運営、自然災害罹災者の救済事業、病院運営、禁酒運動などの成果で知られている（田中和男1991:27-9）。1909年には内務省、1914年には宮内省によって補助金を定期的に受けるようになり、実業界からも多額の寄付をとりつけることのできる社会事業体に成長したのは、ひとえに山室の卓抜した実践家としての能力に負っているものと評価される（田中真人1991）⁷⁾。

次郎らを勧誘した阿部は1927年チリの救世軍士官学校で学び、一躍大尉に昇進して、1928年リマに日本人部を設立した。ちなみに、南米東部における救世軍の拠点は、1909

年チリ・バルパライソに設立されていた。阿部は1935年4月にはサンフランシスコに転任して、リマ日本人部は徐々に自然消滅したとされる(櫻井1935:121-2)。次郎らは、ペルーの救世軍とも交流をもち、1938年1月にはサルバニー少佐の来訪が日記に記されている他、同年8月に山室から救世軍への献金に対する礼状をもらい感激したと日記に記している。

次郎は1932年1月1日の日記に「新年の誓い」として、以下のように書き付けているが、これは戦前期の次郎の生き方を貫く方針としての完成型であったといえよう。

三位一体①宗教 救世軍分隊組織

②教育 家庭学校の完成 日曜学校

③産業 商業振興 農業改善

実業面で充実した実績を積み重ね、安定した家庭生活を送る壮年期の次郎にとって、生きがいを貫く指針として、救世軍というクリスチャン・ミッションに出会ったことで、特に教育にかかわる社会事業を自らの使命として位置づけている。実際に、1932年1月にはチンボテ日本人会の会長に選出され、同会が運営するチンボテ日本人小学校とは別に、自宅近くにタムボレアル学園を5月に創設して、貧困ゆえに教育の機会が与えられていない日本人移民の子ども20名ほどを対象にして、日本語とスペイン語での教育を始め、自身が日本語での教育を一手に引き受けた。同時に、日曜学校を行い、キリスト教教育を試みているが、親世代の理解がなかなか得られにくい様子が伺える。

このような親世代を対象にした運動としては、禁酒会ペルー支部が1932年9月に結成され、次郎も1934年5月のチンボテ支部の集会に参加している(櫻井1935:122)。救世軍でも禁酒会を組織していたが、ペルー日系社会における禁酒会は特に宗教的背景をもつものとしてではなく、自暴自棄な娯楽に陥りがちな移民にとって自己修養的な意味合いの有効性が期待されたものといえるだろう。ただし、実際の日系社会における普及という面では大きな成果をあげたとは言い難い。

いずれにせよ、次郎が自身の実業面における成功だけを目指す生き方をするのではなく、社会事業を行うことによって靈魂の救済も行うというキリスト者としての使命を担う決意は、救世軍との出会いによって明確なかたちを与えられた。1932年の日記には、将来的には国際大学を創設すること、博愛病院を創設して人を霊肉ともに救済すること、などの大事業の夢を仲間と語り合った旨が記されている(4月1日)。また、身寄りのない中国人移民や盲人への慰問を行う(3月25日)など、日系社会にとどまらない慈善の理想に燃えた様子が伺える。1936年日記には、次郎は長女をチリか日本の救世軍士官学校に送るか、救世軍兵士と結婚させるか、という将来像を真剣に検討していた様子もみられる。ただし、救世軍と出会う前にも、次郎にとって宗教が切実な問題として迫ってきた時期があった。それは、1920年日記に集中して現れている。前年5月には敬愛する故郷の父親

を亡くし、同年5月には同じく故郷の祖父を亡くす報に触れ、それまでは無条件に自らの存在を故郷の家の一部と感じていた生存の根拠を考え直す機会に直面したと無関係ではないだろう⁸⁾。次郎がいかに自らを故郷の家の一部と考えていたかは、ペルーへ渡った直後からの送金額の大きさが物語っている。次郎夫婦の収入は、自分たちの切り詰めた生活費を除いて、ほぼそのまま沖縄の金城家長兄へと送金されたと言っても過言ではないほどであった。日記には送金額が詳細に記されている。

しかし、1920年3月6日日記には、「過去6年は長兄のために働いたが、これからは自己のために働く決意」を記している。そして、資本がなければ一生労働者で終るが、男子の面目上も大事業を成功させたい、という家とは独立した個人としての欲望が表現されている。同時に、5月21日日記には、故郷ではとても実現できないだろう120俵もの稲の収穫の喜びの絶頂期にありながら、「宗教なき人生は無味で淋しい」と次兄と語り合っている様子が見られる。

このように「溺れるものは藁をも掴む」心持だった次郎は、病院において日本人にカトリックの教えを施すペルー老夫人がいるという情報を得て、6月17日よりゴンサレス夫人に公理要領(カテキスモ)の書物を与えられて教えを乞うことになった。ただし、スペイン語の読み書きが得意ではない次郎にとっては、十分に意を汲むことができなかったようで、本格的にカトリックに向き合うようになるには、後述する戦後の米川神父との出会いを待つことになる。

戦前期の次郎の教育への熱意は、祖国日本の軍国的拡張主義の脅威が両アメリカ大陸諸国において喧伝される状況において挫かれる。1938年の既述した教育八割法令によってタムボレアル学園は閉鎖を余儀なくされたのだ(ペルー日本人移住史編纂委員会1969:316-318)。次郎が頼りにしていた山本邦之助は、1939年に11年間のペルー生活を切り上げる送別会の席で、遠からず日本人小学校は閉校の運命にあり、日本政府にとって遠い南米は放任の位置づけとなるだろうから、在留民は永住か引き揚げかの決心をするべき、と話している(12月31日)。

次郎および次兄は、学齢期の子どもを沖縄の長兄の元へ送って教育を受けさせているが、子どもの教育をめぐる兄弟間での意見がかみ合わない様子が長年にわたって日記に記されている。次郎はおそらくキリスト教の影響もあって、再三にわたって教育機会の男女平等・頭脳優秀者を制限なくいかすべきという主張を手紙に書いているが、長兄に理解されていない様子だった。子どもの教育問題は、いつの時代の移民の親にとっても、どこで生きるのかを決める人生の大きな選択に関わる。次兄は子どもの教育問題を解決するため1937年に沖縄に帰ったが、長年離れていた長兄との間での意見の対立が多々あり、兄弟それぞれの立場で子どもの教育方針を決めることになった。

1940年に次郎一家は27年ぶりの帰郷をするが、その最中に長兄は亡くなっている。次郎は日本において9カ月にわたって祖国の実情にふれ、紀元2600年大祝典にも夫婦で参列して、すっかり祖国の八紘一宇の精神に心酔する。日本における救世軍がそうであったように、次郎にとってキリスト教精神とナショナリズムの共存には大きな障害を感じなかったようだ。そして、子どもの教育方針に関して、「国策に沿って子女を奉仕させる」ことを決意している。

1941年2月に単身でペルーに戻った次郎を待っていたのは、日米開戦とそれに伴う日系人にとっての試練であった。チンボテ港は北部の重要な交通拠点だったこともあり、太平洋戦争勃発の半年後には、チンボテ付近一帯の日本人に対する追放令がでて、次郎一家も8日間のうちに家財一切の処分をして、縁者のいるリマへと引越しをすることになった。戦争中は故郷の家族との通信もままならず、リマで始めた商売も軌道に乗らない鬱々とした日々が続くが、この間、次郎の心を慰めたのは沖縄の心を奏でる三線のけいこだった。次郎は戦中に三線教室で土工四教本の仕上げをしているが、日記からは、戦中に数多くの三線教室が開かれていたことがうかがえる。

ただし、次郎の教育に対する熱意は消えていなかった。戦中、公式には日本語を使った学校の存在は認められない状態であったが、多くの教育関係者が秘密裏に私塾のようなかたちで日本語教育を細々と行っていた。こうした私塾を開いていた人は30人ほどいたという（伊芸1981:160）。次郎ら沖縄人父兄が中心となって1943年1月から運営していたのが、ハルディン学園である。1945年時点の生徒は21名だった。同学園の教育方針は日本人の誇りをもつ二世を育てるというもので、戦前期との連続性を感じさせる。日本人移民一世が二世の子どもに対して親の心を理解する「日本人」として育てて欲しいという思いは、戦争によって大きく変わることはなかったのだろう。

次郎は、この学校教育活動をつうじてカトリックの米川神父と出会う。では、戦前期の日本人移民にとってカトリックとの出会いはどのようなものだったのかを、次にみてみよう。

IV. 日本人移民と慈善病院とカトリック

戦前期の労働者階層の中には、九州の隠れキリシタンであった者を中心にして、ペルーにおけるカトリック組織が作られている。1915年12月20日『アンデス時報』紙上に、「日本人公教聖心会」発足のお知らせが掲載されている。これによると、当時会員30名ほどを擁し、イエズス会士ピニェダ神父（極東諸国での布教経験あり）を師として、会員の共済および貧困者の救済を目的とした組織として、カトリック教会内で定期的に会合がもたれていた（櫻井編1935:122）。

しかし、多くの日本人移民がカトリック関係者に会う場所は、教会ではなく病院だっ

た。前節で紹介したように、次郎も1920年にチンボテの病院で日本人にカトリックの公教要理を教える婦人に会っている。それはどういうことか。

ペルーという日本とは全く異なる風土で慣れない過酷な労働に従事した移民たちの多くは病に倒れた。これらの病人が治療・看護を受けたのが慈善病院であった。地域によって異なるが、リマの慈善病院はリマ社会福祉協会 (Sociedad de Beneficencia Pública de Lima) によって運営される貧困者のための病院である。伝統的にカトリック国では、病人や身寄りのない貧困者に救いの手を差し伸べてきたのはカトリック教会や関連組織であるが、既述したとおり共和制となったことで慈善組織も世俗化された公共団体であるリマ社会福祉協会の管理下に置かれることになった (山脇 2000 : 89-91)。しかし、実際に慈善病院で働く多くの人々はカトリック関係者である。看護にあたったのはカトリック・シスターだった。

1907～13年の7年間に、リマの男性用慈善病院であるドス・デ・マヨ病院に入院した日本人の数は、のべ3,393人にも上った (『アンデス時報』1917年9月20日)。当時の在ペルー日本人人口が8,000人弱であったことを考慮に入れるなら、日本人入院者数の多さは驚異的ともいえる。こうした日本人入院者は看病の都合上ひとつの集合病室に集められた。この日本人病室で1906年から1941年まで献身的な看護をして、「日本人移民の母」と呼ばれたのがフランス人カトリック・シスターのマドレ・フランシスカ (Sor Francisca Gros (1867～1957)) である。

マドレ・フランシスカはフランスで22歳の時に Hijas de Caridad 修道会に入り、くしくも第一回日本人移民と同じ1899年にペルーに渡り、孤児院での奉仕を7年間行った後、建設されて間もないドス・デ・マヨ病院での奉仕を命じられた (Yonekawa 1957 : 19-21)。それまでに、日本人とは全く縁もゆかりもなかったマドレは、独自に辞書を入手して、カタコトの日本語を使ったコミュニケーションをとり、自費を投じてまで慈母のごとき懸命な看護をしたことで知られる。マドレの看護を受けた日本人は1万人前後ともいわれる (伊藤・呉屋 1974 : 104)。

マドレが1938年8月に修道生活50周年を迎えるのを記念して、11月にはリマ日校大講堂において中央日本人会主催の祝典が行われている (Yonekawa 1957:31-2)。この祝典では、1907年にドス・デ・マヨ病院に入院して、マドレの献身的看護に感銘を受け、治癒後もマドレの下で9年間働いた経験をもつ日本人男性がスペイン語で以下のような内容のスピーチをしている (Yonekawa 1957:36-7)。

日本人病室は多い時には百名もの患者でいっぱいになった。スペイン語が分からず、入院したものの大変心細い思いだった日本人患者に対して、マドレが「何処から来たか?」「どこが痛い?」「なんという(名)か?」「何が欲しいか?」と日本語で質問してくれた。そ

れは患者にとって一筋の希望の光で救いであった。30年前の日本人は本当に貧しかった。マドレは自分がフランスの家族から受け取っているお金を自分の子どもにできるように分け与えた。医師が回復を諦めた患者に対してもマドレは熱心に看病して、そのおかげで多くの命が救われた。亡くなりそうな患者には、洗礼をうけさせるためにカルロス神父を呼び、患者の魂の休息のためにミサをした。墓地まで付き添う家族など誰も居ない人を見送ったのもマドレである (Yonekawa 1957 :39-40)

このスピーチから見えてくるのは、カトリック国における死をめぐる諸問題である⁹⁾。カトリックの教えのもとでは、神による最後の審判を受けるまでに、神の言葉を受け入れたカトリック教徒になっている必要がある。そうでなければ永遠に魂の休息が得られない地獄や煉獄をさまようことになる。魂の救済のためには、死ぬ前にカトリックとしての洗礼を受ける必要があるし、生前に犯した罪を神父に告解して許しを得なければならない。こうした任務を負うために、死に最も近いところにいる患者を看取るカトリック神父がカトリック国の病院にはつきものなのだ。それをサポートするのがシスターである。マドレ・フランシスカが洗礼を受けさせた日本人は、1,114名。このうち940名は死亡。残り214名は治癒退院したとされる (Yonekawa1957 :20)。

中央日本人会としては、マドレの修道生活50周年祝典にあわせてマドレの銅像をリマ日校敷地内に建立することを提案していた。しかし、マドレは個人的顕彰を受けることよりも、日系社会にカトリックをより深く根付かせるための礼拝堂を作って欲しいと希望した。これに応じて、中央日本人会は礼拝堂をリマ日校敷地内に建設し、生徒によりしっかりと現地の習慣に合致した宗教教育を行うことができるようにすることを決定した (Yonekawa1957 :33)。1939年6月には起工式が行われ、このミサはリマ大司教によって執り行われるほどカトリック関係者の注目を集めるものだった (Yonekawa1957 :46-7)。伝統的に非カトリック国出身者によって構成される日系社会が、独自の礼拝堂を建立するということの意味の重さが注目されたのだ。

このようにマドレは日系社会のための礼拝堂建設の原動力となっただけでなく、日本語による布教ができる神父をペルーに呼び寄せるためにも多大な尽力をした。前述のイエズス会士ピニェダ神父が1934年に亡くなって以降、同修道会士のガルシア神父が引き継いでいたのだが、マドレの経験上、どうしても日本語で日本人を導く神父の存在が日系社会のカトリック化には不可欠と感じていたのだ (Yonekawa1957 :23)。マドレは独自の人脈を頼りながら、ローマ教皇庁へ働きかけることに成功し、24年にわたる日本での伝道経験のあるカナダ出身のフランシスコ会士：カリスト・米川神父 (Calixto Gelinas Yonekawa) がペルーの日本人改宗伝道部担当者に任命され、1936年2月にリマに到着した (Yonekawa1957 :23-5)。

カリスト・米川神父と1938年10月に来秘するウルバノ・米川神父 (R.P.Urbano Maria Cloutier) は、両者ともカナダ出身で日本人の血を引いているわけではなく、日本伝道中に親子の契りをおかして日本に帰化したために米川姓をもっている (Yonekawa1957 :28-9)。両米川神父は、マドレ・フランシスカのペルーにおける長年の経験にもとづく助言を受けて、日本語・スペイン語・フランス語を駆使して積極的な布教活動を開始した。ペルーにおける二大日本人小学校であったリマ日校およびカジャオ日校におけるカトリックに関する宗教教育が、両米川神父によって正式に行われるようになったのも、礼拝堂が建設された1939年度以降のことである。

V. 二世教育とカトリック：第二世カトリック修養会

1966年に実施されたペルーにおける日系人社会実態調査によると、一世の34%がカトリック、1%がプロテスタント、2%が神道、59%が仏教であるのに対して、二世の95%がカトリックで、仏教は2%にすぎない (友枝1969:86)。しかし、戦前期のリマ日校の生徒に関しては、同校においてカトリックの宗教教育が聖職者によって正式に開始された1939年当時、約1,500名の生徒のうち300名しかカトリックの洗礼を受けていない (Yonekawa 1958:47)。つまり、二世のカトリック化が急速に進行するのが米川両神父による布教活動が活発化した1940年以降であることが推測される。

1940年8月には当時の北田公使による米川両神父への働きかけによって日系社会の若者によるカトリック文化協会として《Asociación de Cultura Católica》(日本語では一般的に「第二世カトリック修養会」と呼ばれる)が発会している。非カトリック信者でも会員になることができ、「カトリック教義の研究と実践をつうじて、より深い普遍的文化を獲得すること」を会の目的として掲げている (*Boletín de la "Asociación de Cultura Católica"* No.1-1942: 2)。名誉会長としては、日本側は日本国公使、ペルー側は元文部大臣のホセ・デ・ラ・リバ・アグエロが就任し、会長を初めとした役員メンバーは二世高学歴者・専門職の人々によって構成されていた¹⁰⁾。二世の中に弁護士や会計士などの専門職に就く若者が誕生していたのである。

女子部も1941年12月に創設されているが、この際に重要な役割を果たしたのが、北田公使の後任だった坂本公使夫人である。両公使夫人は大変熱心なカトリック信者であったという (*Boletín de la "Asociación de Cultura Católica"* No.1-1942: 10-11, No.2 - 1942:4)。

既述のように、1940年5月には排日大暴動が起こり、日系社会がよりペルー社会に開かれたものになるための改革が求められていた時期であり、こうした二世エリートを中心にしたカトリック組織を立ち上げることは、一種の排日対策であったということもできるだろう。そして、実際に戦争中に日本人による組織が活動できなくなっている間、

第二世カトリック修養会はリマ大司教区日本人改宗伝道部の下にあるカトリック団体であるがゆえに、自由な活動が公的にも許されるほぼ唯一の日系組織として機能することになった。

一例を挙げる。戦中、当時のローマ教皇によってペルー在住日本人困窮者に対する深い同情に伴う支援金が1944年と翌45年の二度にわたって下賜された。この際に配分をローマ教皇庁駐リマ大使によって任せられたのが第二世カトリック修養会であった。修養会メンバーが当事者への面接選抜を行って、44年には82家族が支給対象となっている (*Boletín de la "Asociación de Cultura Católica"* No.5-1944: 1, 6)。

第二世カトリック修養会は、1941年当時会員約50名から、1944年8月には会員約200名に成長して、二世青年たちが教養を高めて成長するための健全な集会を開催する組織として周知されるようになった (*Boletín de la "Asociación de Cultura Católica"* No.6-1944: 1)。修養会の定期刊行物には、会員の間での清遊会・地方への伝道活動などの活動記録、ペルーの歴史や歴史的人物に関する読み物、カトリック教義やカトリック教徒としての注意事項などの解説が記載されており、ペルー人としての文化的教養を高めようとしている様子が分かる。特に女子部の活発な様子が印象的である。

しかし、第二世カトリック修養会の名が日系社会で広く認知されるようになったのは、何よりも戦後初の大規模な日系人の集会として1946年5月にサンタ・テレシタ教会講堂で「母の日」慰安演芸会 (*Gran Actuación Literario-Musical en Homenaje a la Madre*) を成功裏に開催したことによる。講堂の定員が600名のところ1,000名以上が押しかける盛況ぶり、昼の部と夜の部がそれぞれ6時間かけて行われた (*Boletín de la "Asociación de Cultura Católica"* No.10-1946: 3-6)。その後も10年以上にわたって同会を開催し、戦後の日系組織の正式な復活までの間、日系社会の希望の道しるべとしての役割を果たしたといえるだろう。

この記念すべき第1回演芸会に、次郎は二つの演目をもってハルディン学園の生徒たちによる出し物で参加している。寸劇か朗読だったようだ。リハーサルと本番の様子が日記に記されている(4月21日, 5月2日)。その他の演目は、①ピアノ・リサイタル②女性独唱・合唱③日本舞踊④伝統舞踊⑤スペイン舞踊・folklore舞踊⑥ダイアログおよび詩の朗読などから成り、主に修養会メンバーの多数のグループによって行われている (*ibid*)。

こうした縁によって、1946年11月9日にはハルディン学園に米川神父を招いて宗教教育の時間をもっている。この時の日記には「さすがは宗教家。話がよくわかる」と感心している様子が記されている。しかし、47年から48年にかけてはチンボテ近郊での稲作を再興しようとする事業に忙しく、次郎本人が本格的に米川神父の指導の下にカトリック研究を始めるのは、リマに腰を落ち着ける決心をした後の1949年11月のことで、12月に

は入信する決意を固めている。そして、1950年1月には同神父から公教要理を教えられ、3月には洗礼と聖体拝受をしている。この背景に何があったのか、日記から抜粋する。この日は、次郎の55回目の誕生日である。

「(前略) 昔のイスラエル民族がカナンの地を求めて永年の旅をしているとき神を信じるときは勇敢で不信仰の時は必ず敗北したとの旧約の文は自分の体験と一致する。戦時中、希望も信仰も失ったがその結果はみじめな物質的・精神的無気力・貧困となって他の軽侮をうける様子になった。希望がなければ万事冷却して活動力が減退する。神はこのあわれなる罪人を救わん為に悩み苦しみを与へ給ふた。ここに於いて余の生きる道は信仰の生活を復活する事に存す。ああ神よ、あわれみ給へ救い給へ。残る生涯を神の恩のため在留民の為に献身せん事を念願し希望が輝いてきた」(1949年12月16日)。

つまり、次郎は自らの人生を旧約聖書におけるイスラエルの民の経験に照らして理解することによって、将来にむけてなすべき目標を設定した。そして、同年12月31日には、無統制・混沌時代にある日系社会に存在する根本的な病根としての一世と二世間の相互信頼の欠如を克服するために、宗教の力をかりたカトリック運動を興す決意を記している。実際に1950年7月には次郎を中心とした一世のカトリック信者を中心にして、コミテ・サンフランシスコ(Comité San Francisco)という名称でカトリック団体を創設し、ペルー社会において日系社会が果たすべき役割の自覚を呼びかけ、慈善活動に取り組み始めた。慈善活動の対象は、ペルーにおける災害罹災者や貧困層などであり、日系社会に閉じた活動ではなかった。さらに、日本語での支援を必要とする恵まれない日本人高齢者や困窮者に対する慈善事業を行った点が二世カトリック修養会との違いであったが、この二つの団体は同じ日系カトリック団体として1960年代まで協力しあいながら活動を展開することになった。

次郎の還暦祝いは、1954年12月サン・アントニオ・デ・パドワ教会の中庭で、甥の光太郎が主催者となり、多数の教え子やコミテ・メンバーに囲まれて開催されている。米川神父がリマ大司教区日本人改宗伝道部を任せられてから、同教会が日系人の所属するホームとしての機能を果たしてきたのである。そして、同じ1954年11月には、日系二世で初の聖職者として、マヌエル・マサシ・カトウの叙階式がリマで行われ、次郎もこのことを大変喜んでいる。

カトウ神父は、1941年に米川神父によって洗礼を受け、1947年からカナダのフランシスコ修道会で学んできた(Yonekawa1954:80)。二世カトリック修養会の定期刊行物には若かりし日のカトウ神父が執筆した記事が多数掲載されている。カトウ神父は、その後、日系社会のカトリックリーダーとして堪能な日本語を駆使して、一世と二世の間だけではなく、日本とペルーを架橋する役割を果たしてきた。

VI. おわりに

戦前のペルーにおける日系社会の教育に深く関わった人物の筆によるものと考えられる文章で、日系人の信仰の問題が以下のように語られている。「郷に行つて（ママ）は郷に従う鉄則として、（中略）信仰にも異教徒の汚名を早く返上せねばならぬ筈である。しかるに第一世にはなかなか難しい問題で、他宗派とりわけキリスト教に帰依することは、祖先を捨てる思いで容易に融けこめず、真の同化の域に達するには、二世三世の時代を俟たねばならないのが現状である」（日本人ペルー移住史編纂委員会 1969：300）。

この語りは、移民一世の引き裂かれた状況を端的に表している。カトリック国ペルーにおいて生きる上で、カトリックと無縁ではいられない。人々の生活と人生をカトリック原理が貫いている社会なのだ。病氣をして世話になるのはカトリック・シスターで、仲間の葬儀を出すのにもカトリック神父の介在が必要になる。たびたびカトリックの行事に参加せざるをえない。しかし、一世の心情として、日本の故郷とは異なる現地の宗教に完全に同化するということが難しい。カトリックへの改宗が、自分の存在を完全に故郷と切り離すかのような感覚を、一世の多くはもっていたのだろう。

しかし、ペルーにおける金城次郎にとって、キリスト教に帰依することは、「祖先を捨てること」ではなかった。沖縄人である次郎にとって先祖祭祀は当たり前のことであり、私たちが自分の身体を「捨てる」ことができないのと同じようなものと言ってもよいだろう。1940年をふりかえる年末の日記には、子どもらに先祖崇拝の心を涵養する方針を記し、キリスト教の神に祈りを捧げている。次郎にとって、キリスト教の信仰と先祖崇拝は両立可能なのである。

本稿を通じてみたとおり、次郎にとってのキリスト教は、自身が社会とどのように向き合うべきなのかを教える指針としての役割を果たした。ペルーでの生活を積み重ねるうちに、先祖祭祀以外の人生の指針が必要であることを次郎は痛感していた。それは、決して次郎の内面的な霊的救済のみを求めるものではなく、自らを取り巻く社会に働きかけることを通じて、生きる意味を見出そうとするものだった。

次郎にとっての社会への働きかけは、実業面における成功を求めることと、社会事業としての教育活動や慈善活動を行うことを通じて、キリスト教精神を実現することだった。こうした自己形成の方針は、明治日本の青年知識人がお手本にした西洋的立身出世の型にぴったりとあてはまる。個人が目指すところとあるべき社会の姿が、分かちがたく結びついている。ペルーにおける次郎にとっての社会は、多くの場合は結果的に日系社会となったが、次郎をキリスト教に導いた考え方そのものはナショナリズムに縛られない社会改革や社会正義の実現を目指す精神であったといえるだろう。

また、ここでいうナショナリズムには、沖縄人として非沖縄系日本人と区別された形で

存在するナショナリズムも含まれることは特記されてよいだろう。ペルーにおける次郎は、戦前・戦後を通じて、沖縄人と非沖縄系日本人の間を架橋する社会的活動を積極的に行っていたが、だからといって沖縄人組織に加わらなかったわけではない。つまり、沖縄ナショナリズムを否定していない。次郎の人脈には米州にまたがる国境を越えた沖縄人同士の交友関係もあり、後年アルゼンチンに再移住したのはこのためといってよい。次郎は、実業と宗教と社会事業を一体化させた理想の生活を送るために、ナショナリズムに囚われない生き方をしたといえるだろう。

日系社会はペルーと日本という二つのネイションの綱引きの間にあるものとしてイメージされがちだが、本来もっと多様な思惑のベクトルの間に存在するものとして認識されてよいはずだ。本稿で行ったことのひとつは、キリスト教という要因を介在させてペルーにおける日系社会の歴史をダイナミックに見直してみる試みである。

日系社会のカトリック化は二世世代からというステレオタイプの認識に止まらず、キリスト教との関わりを一世の時代から捉え直すことによって、移民がもつトランスナショナルな性質を再考することができるだろう。逆に、日系社会のカトリック化に関しても、ペルー生まれだからという条件で二世が「自然に」カトリック化されたわけではなく、カトリック化を進める様々な思惑をもったエイジェントが特定の歴史的な状況の下で働いたことが明らかになったのではないだろうか。

謝辞

本稿執筆のため、金城次郎日記の閲覧に際しては、沖縄県教育庁文化財課資料編集班の小野まさ子さんをはじめとした皆様にあたたかいご協力をいただきました。記して心より感謝申し上げます。

注

1) 金城次郎日記は、現在、沖縄県教育庁文化財課史料編集班の管轄下にある。1984年3月19日、金城次郎氏本人によって1910年以降それまで欠かさずに記録されていた大部の貴重な日記が、沖縄県教育委員会に資料とし寄贈された。寄贈直後より、沖縄県立図書館史料編集室で金城次郎日記を積極的に紹介したのが金城 功である(金城1985,1986,1987,1989)。本稿では、(金城1989)における金城次郎日記の通史的紹介を参照しつつ、沖縄県教育庁文化財課史料編集班が保管している日記を閲覧・記録したノートを主な資料として活用している。ペルーは第二次世界大戦における米国への協力を早い時期から表明しており、日系人に対する様々な弾圧があったため、多くの人が無用な嫌疑をかけられないために日本語で書かれたものを処分したといわれる中で、金城次郎

日記の存在は研究資料として大変貴重なものとなっている。

- 2) ペルーにおけるカトリックの権威・公的な役割がいかなるものを理解するのに、以下の引用文は大きな助けになるだろう。

「(前略) 一九九五年の「東京地下鉄サリン事件」は、「オウム真理教」という一つの小さな宗教団体が、特殊な教祖や教義や組織によって、重大な社会的事件を引き起こしたという意味で、宗教の社会的なインパクトを、ネガティブなかたちで日本社会につけてはいた。この事件に衝撃を受けなかった人はいないが、その後、一九九六年から七年にかけて続いた「ペルー大使公邸占拠事件」は、もっと緩慢なかたちで、宗教の公的役割という問題を、私たちに問いかけるものであった。その深刻な意味に気づいた日本人は、おそらくあまり多くはなかったと思う。

この事件は、フジモリ政権に対立するグループが、日本大使公邸に人質をとって長期間立てこもり、最後は強行突入で解決が計られたもので、事件の内容そのもの、つまり武装グループの背景や要求には、宗教的な要素はほとんどなかった。ただ、最高度に政治的な舞台上で、政府側とグループ側の調停役を務めたのが、カトリック聖職者であるという、日本の慣例からすれば想像できない政教関係の情景が、事件報道で繰り返し流された。緩衝地帯を、双方の信頼を受けて徒歩で行き来するシプリアーニ師の無防備な映像は、ペルーにおけるカトリックの位置がいかに高く公的なものであるかを示しており、それをみた日本の心ある仏教者の一人に、「同じ宗教者として忸怩たる思い」と語らしめた。もし日本国内で同様の事件が起こったならば、調停役は赤十字などの国際機関が担うか、身代わりの政府高官が送られるか、少なくとも一宗教家に委ねられることは、神道者であれ仏教者であれキリスト者であれ、あり得ないからである。政府関係者や政治学者にとっては、在外機関の危機管理を考え直させる事件であったろうが、心ある宗教関係者にとっては、宗教の公的役割ということを問いかける事件であった」(津城 2005:ii-iii)。

- 3) スペイン植民地期の奴隷制下における奴隷所有者は、奴隷でさえもカトリック教徒であることを前提とした扱いをすることが要求された。新大陸にむけた奴隷の送り出しをするアフリカの地でカトリックの洗礼を受け、労働と生活の場である大農園ではカトリック教徒としての義務と権利が奴隷にも与えられている。19世紀ペルーにおけるアフリカ系奴隷の実態については、(山脇 2001)を参照されたい。ひるがえって、中国人および日本人移民労働者には、かれらの人間としての扱いを保障するものがあったといえるのか。近代的な労働者の権利を保障する仕組みが未発達な状態であったペルー労働市場における中国人移民労働者の位置づけに関しては(Rodríguez Pastor 1989)に詳しい。また、近代移民の後ろ盾になるのは、多くの場合、出身国領事館である。在ペルー清国大使館は、1884年末に正式に設立され、しばしば暴徒に襲われた中国人移民の一時保

護のために広大な敷地面積を誇る屋敷が公邸となった (Middendorf 1893→1973 :174-5)。それほどアジア人に対する迫害が深刻であったという証でもある。

- 4) 『リマ日報』と『秘露時報』のそれぞれの偏りから自由な立場での言論の場が必要であるという主張を掲げて、1941年8月には『秘露報知』が創刊されたが、前述の二紙と同様に太平洋戦争開戦によって日本語新聞の発刊は停止されたため、短命に終わった。『秘露報知』は、わずかな部数であるが、リマ日本人移住資料館に保管されている。なお、戦後日系社会にとって待望の日本語新聞復刊は1950年7月1日の『秘露新報』創刊まで待つことになった。
- 5) ただし、同法令の実施についての厳格な取締りは猶予された状態にあって、後述している教育連盟会においても、引き続き同法令に対応した日本人学校運営のあり方が太平洋戦争勃発までの間に検討事項とされていた。ペルーに限らず、ラテンアメリカ世界では法令の抜け道を探すことこそが「賢い生き方」として「奨励」される価値観が一般に普及しており、中央日本人会は賄賂などを通じて非合法的な処世術を行使することにあまりに熱心になりすぎて、結果として排日運動を促す結果をもたらしたのではないか、という批判の声は同時代にも日系社会の中に存在した (日本人ペルー移住史編纂委員会 1969 : 238-242)。
- 6) 次郎は、それ以前から新聞社主催懸賞論文の入賞経験がある。1922年『アンデス時報』創立10周年記念懸賞論文では2位 (賞金30円)、1923年『秘露時報』懸賞論文でも2位に入賞している。1917年当時から、『アンデス時報』のみならず、日本の『萬朝報』および『実業之日本』を定期購読している他、大正期の都市部青年の間でベストセラーになっていた黒岩涙香『天人論』を1919年に熟読して人生観に大きな影響を受けたことが日記に記されており、次郎の知的バックグラウンドには日系社会の指導者層とかなり親和的な側面があったことが伺える。
- 7) 日本における近代国家官僚組織としての社会事業を管轄する部局の登場は、内務省において「救護課」が1917年に設置されるのを初めとしていることを考えると、救世軍の社会事業がいかに画期的であったかが理解されるだろう。
- 8) 柳田國男によれば、日本において個人レベルでの信心というものが生まれた背景として「家郷の地を離れる」という体験が重要なきっかけであったのではないかと、いう。これは、次郎が先祖を祀る家・故郷を遠く離れている状況で、個人レベルでの信仰を必要とした状況を説明するのに適切な根拠となるように思われる (柳田 1942 = 1990 : 404)。
- 9) 戦前期ペルーにおける日本人移民の葬儀・埋葬・祭祀をめぐる諸問題については、(柳田 2003) に詳しく論じられている。
- 10) 日本公使館の肝いりで排日運動への対応手段として作られた組織としては、1937年10

月20日創設の日秘文化協会（Asociación Cultural Peruano- Japonesa）がある。この発会式はペルーのエリート階層にしか開かれていない社交場であるクラブ・ナショナルで開催され、両国の関係者30名が集まったという。日秘友好と日本文化の普及を目的とした協会では、メンバーには、元駐日本ペルー大使、サンマルコス大学教授ほか当時の文部大臣リバ・アグエロらが出た（日本人ペルー移住史編纂委員会1969：218）。しかし、同協会が排日運動への積極的な対抗手段を打ち出すことはできなかった。

文献

- 金城 功 1985「金城次郎氏の日記にみる移民の転耕などについて（史料紹介）」『沖縄史料編集所紀要』10号：95-117.
- 1986「金城次郎氏の日記に見るペルー移民の生活の断面について」『沖縄史料編集所紀要』11号：47-69.
- 1987「金城次郎氏の日記に見るペルー移民の生活について」『史料編集室紀要』12号：116-126.
- 1989「金城次郎氏と日記」『史料編集室紀要』14号：71-107.
- 田中和男 1991「救世軍の社会運動」同志社大学人文科学研究所編『山室軍平の研究』同胞舎出版：27-56.
- 田中真人 1991「救世軍と皇室」同志社大学人文科学研究所編『山室軍平の研究』同胞舎出版：308-335.
- 津城寛文 2005『＜公共宗教＞の光と影』春秋社.
- 友枝啓泰 1969「ペルー日系人社会の変容と同化」在ペルー日系人社会実態調査委員会編『ペルー国における日系人社会』：1-62.
- 前山 隆 1996『エスニシティとブラジル日系人』御茶ノ水書房.
- 前山隆編著 1996『ドナ・マルガリーダ・渡辺 — 移民・老人福祉の五十三年』御茶ノ水書房.
- 柳田國男 1942 = 1990「日本の祭」『柳田國男全集 13』筑摩書房：213-430.
- 柳田利夫 2003「初期日本人ペルー移民の葬送と心性 — 契約耕地からリマ首都圏への移動と埋葬形態の変化 —」、『アメリカス研究』No.8:1-27.
- 山脇千賀子 2000「リマにおける新たな「社会」の胎動 — 社会組織・ソシアビリティ・エスニックグループ —」『筑波大学 地域研究』18：87-105.
- 2001「奴隷と女の間 — 十九世紀リマ身分制社会の一側面」遅野井茂雄・志柿光浩・田島久歳・田中 高編『ラテンアメリカ世界に生きる』新評論：59-76.
- 吉田 亮 2011「1910年代カリフォルニア日本人移民キリスト教会の越境的リーダーシップ」『移民研究年報』第17号：3-21.

Middendorf, Ernest W. 1893→1973 *Perú Tomo I*, Universidad Mayor de San Marcos.

O. ケーリ著・江尻 弘訳『日本プロテスタント宣教史 最初の50年 (1859-1909年)』教文館 2010年

Rodríguez Pastor, Humberto 1989 “El inmigrante chino en el Mercado laboral peruano, 1850-1930”, *HISLA-Revista Latinoamericana de Historia Económica y Social XIII-XIV*, Lima: 93-147.

【日系人資料：日本語】

『アンデス時報』リマ, 1913年～1918年12月

伊芸銀勇 1981 「私の戦後史」 沖縄タイムス社編『私の戦後史』第五集, 沖縄タイムス社: 43-171.

伊芸銀勇編 1988 『ペルー移民 75周年記念誌』リマ, ペルー沖縄県人会.

伊藤 力・呉屋 勇 1974 『在ペルー邦人 75年の歩み』リマ, ペルー新報社.

『金城次郎日記』 沖縄県教育庁文化財課史料編集班.

櫻井 進編 1935 『在秘同胞年鑑』リマ, 日本社.

田中重太郎 1969 『日本人ペルー移住の記録』東京, ラテンアメリカ協会.

日本人ペルー移住史編纂委員会 1969 『ペルー国における日本人移住史』東京

秘露日本人商業組合編 1936 『法令指令翻訳集』リマ, 秘露日本人商業組合.

山本邦之助 1948 『南十字星を望みて』東京, 新教材社.

【日系人資料：スペイン語】

Boletín de la “Asociación de Cultura Católica”, Año 1. No.1, Lima, Misión Católica Japonesa, Marzo de 1942 ~ Año6.No.11, 1947

Urbain-Marie Yonekawa 1958 *Sor Francisca Gros (1867-1957)*, Lima, Misión Católica Japonesa.

(やまわき ちかこ・文教大学国際学部准教授・社会学)

**Japanese Community and Christianity in Peru During the First Half of
20th Century:
Analyzing the Diaries of Jiro Kanashiro(1894-1988)**

YAMAWAKI Chikako

Faculty of International Studies, Bunkyo University

(Sociology)

Keywords: Religion and Social Enterprise, Second Generation Education Problem, Catholic Sister as Nurse, Catholic Cultural Association for Nisei, Nationalism and Christianity

Japanese immigration to Peru was started in 1899 thanks to the personal network between Japanese and Peruvian elite who studied in San Francisco, USA, in late 19th century when both nation-states were demanded rapid modernization. However, in 1930s Japanese Community in Peru which had as much as 20 thousands people at that time suffered from severe anti-Japanese policy motivated by nationalism that dominated all over the world especially after Great Depression. So that the Japanese bilingual schools for second generation in Peru were located between nationalism of Peru and Japan.

Key person for Japanese integration to Catholic community in Peru was a French catholic sister called “Madre Francisca” who worked as a nurse in Dos de Mayo Charitable Hospital from 1906 to 1941 looking after especially Japanese patients. She was a first catholic person with whom many Japanese immigrants encountered in the state of both physical and mental crisis, and afterward she became to be called “Mother of Japanese immigrants”. Thanks to her endeavor, two Canadian Catholic missionaries who had surname Yonekawa as naturalized Japanese and good command of Japanese language came to Peru in 1936 and 1938. They activated Catholicization in Japanese-Peruvian community and formed Catholic Cultural Association for Nisei motivated by the then Japanese Consul in August 1940. From his point of view Japanese-Peruvian community need to cope with anti-Japanese movement through Catholicization, as four months before the community in Lima suffered from a great riot against Japanese owned shops and houses.

The author tries to describe the role of Christianity among Japanese immigrants in Peru during the first half of 20th century analyzing the diaries of Jiro Kanashiro (1894-1988) who immigrated to Peru from Okinawa in 1914 with his wife as contracted plantation workers, and later had success in rice production in northern coast area called Chimbote. He was baptized by Father Yonekawa in 1950, but during 1930s he was strongly influenced by Methodists’ mission called Salvation Army and also by Japanese intellectual Christian leaders. The Salvation Army was born originally in London in 1865, and afterward landed at Tokyo in 1895. They were one of the first institutions that realized benevolent social activities in the frame of modern nation-state offering shelters and aids for the victims of natural disaster, poverty and social evil.

Although Jiro Kanashiro’s case of Christianization shows uniqueness among Japanese immigrants in Peru, his life trajectory is colored by important and transnational persons, institutions, and events in order to understand the Japanese community during the first half of 20th century in Peru.